

# 野村幸一郎著『森鷗外の歴史意識とその問題圏』

——近代的主体の構造——

辻 本 千 鶴

「私」という主語から始めるのは、書評としての客観性を欠く

と批判されるであろうが、そのように始めたい誘惑が去らない。私にとって魅力的な読書体験とは、手にした一冊の書物のなかで完結するものではなく、辿っていく活字の連なりが、それまでに読んでいた他の書物の内容を喚起させ、両者が響き合つて思考や感性の枠を揺さぶるものである。その意味においても、野村幸一郎氏の『森鷗外の歴史意識とその問題圏——近代的主体の構造——』（見洋書房 二〇〇二年十一月）は魅力的な一冊であった。

「意味という病」（柄谷行人）、「共同幻想論」（吉本隆明）などというタイトルを思いつつ読んだ。それに、これは偶然であるが、同時に読み進めていた『わたし』という幻想、〈わたし〉という呪縛（若田恭二著 せりか書房）との間に内容の共鳴が感じられた。試みにその一節を引こう。

近代科学、あるいは近代的思考をささえているのは、因果関係という秩序への信頼です。（中略）因果関係と主体。その存在をいつも暗黙の前提として、わたしたち近代人は世界を

理解しようとするのです。

ここで若田恭二が掲げている問題は、野村氏が本書で扱っている問題と連底している。それは双方ともミツシエル・フーコの解析してみせた内面化された権力に着目するところから問題を提起しているからでもある。が、しかし、私には両者がともに、近代の自明性を問うという作業を通じて、現代に生きる者の生の虚妄を問い、それでも尚生きることへの肯定を求めようとしているからではないかと思われる。勿論、両者に「フィールド」の相違はある。若田恭二にとって問題の所在は、「近代という時代は、偶然を必然的真理に置きかえ、世界のカオスに合理的秩序を与えることによって、逆に人間の生から生きる躍動を奪いさりました」と語られる時代の病理である。それに対し、野村氏の著書の目的は「〈主体〉という表象の構造を前提としつつ、文学に描かれた近代日本のエートスを描き出すところ」（「序にかえて」）にある。

これもまた個人的な好みであるが、充実した序文を持つ書物に出会うと、先を読み進む喜びが増す。『森鷗外の歴史意識とその

問題圈」はまさにそのような本である。

「序にかえて」という長い序章において、著者はハイデガーの歴史観を引いて、「私たちが主体という言葉を口にする時、何ものにも囚われない自由な個人が想定される」、「その自明性」への懐疑に思考を至らしめている。さらに、「主体の獲得と権威の内面化を符符で結ぶフーコの議論」と、「民族や共同体の精神や文化の中に、自己存在を定位しようとする投企によってのみ、現在には本来性を獲得し得るといふハイデガーの主張」との交錯点を指摘している。主体性獲得にまつわる試行錯誤と苦悩―近代の文学者たちが西洋思想を消化しようとして不可避的に陥ったその状況を、著者は本書を通じて明らかにしてみせている。

森鷗外を、主体性の問題について自覚的であった近代知識人の雄と目して、本書は進められている。鷗外の歴史小説の登場人物たちの「行為の意味性」をめぐる差異が丹念にとらえられ、翻訳や講演をも視野に入れつつ、「かのやうに」・「妄想」等の叙述を整理し、「世界そのものが意味を持たない以上、いかなる表象も、それに内包される真理性も、『混沌』という世界の裸形を歪曲した非真理性に過ぎない」ことを凝視していた鷗外の姿を浮き彫りにしている。このような縦横な作品の探索は、前著『森鷗外の日本近代』（白地社 一九九五年三月）における研究の成果を発展的に継続させたものと思われる。

本書の中心はヴォリニウムにおいても「第三章 一九一〇年代の森鷗外」であろう。その前半「第一節 史実と神話の間」・

「第二節 ルドルフ・オイケンの受容」はいわゆる五條秀麿物に関する論考である。具体的に作品名を挙げるなら、『かのやうに』（明治45・1）・『吃逆』（明治45・5）・『藤棚』（明治45・6）・『錠一下』（大正2・7）が論じられている。この諸作に共通する主人公・五條秀麿は、留学帰りの少壮学者としての学問の良心と、華族の嫡男として国家の存立に寄与すべき義務感との狭間で佇立している。「かのやうに」本文にいわく、「秀麿が為めには、神話が歴史でないと云うことを言明することは、良心の命ずる所である。それを言明しても、……神話の包んでいる人生の重要な物は、保護して行かれると思っている」。そこに秀麿の「人間の智識、学問」「宗教」の根本としての「かのやうに」哲学が生じる。しかし、彼を佇立から行為へと推し進めるエネルギーともいべきこの哲学は、父子爵との間に世代間の齟齬を生むだけでなく、友人綾小路の反駁にあう。続く諸作には、子爵や友人の同調を得られない秀麿が、思想的に彷徨する過程が描かれている。

それを跡づける野村氏の手法は、一方では作品内での人物像の機能に目配りしつつ、他方では「混沌」とした政治状況の中に国家秩序を実現するための「明治政府の方策を聞かしている。さらに、当時の知識人たちの西洋思想の受容が丹念に辿られている。このような作業を通じて読者に迫ってくるものは、五條秀麿が鷗外の思想的分身であるということにとどまらない。先覚的知識人であった鷗外が、いかに時代の苦悩の申し子であったかということでもある。それを作者サイドから実証するのみならず、例えば

穂積八束や井上哲次郎などの叙述を読み解きながら、秀磨との共振を浮き彫りにした点が、本書の特色であり功績であると思われる。

五條秀磨が辿りついた思想的帰結を、本書の記述を引用するかたちで紹介しよう。

〈神〉(天)〈精神〉などと言われるような、個人的生を意味づける聖なる中心との連結をうしなつた近代の日本人が、ふたたび回路を開くにはどうすればよいか。この問題についての『吃逆』の結論とは、一言で言ってしまうれば、新しい精神文明の創出である。(中略)より具体的に言えば、官能の満足や利得の追求より、自身の内部に宿るはずの本来の性格の獲得や、超越的なものとの連結に中心的価値を置くような、新しい社会、新しい文化を建立するというものである。

### 第三章 第二節

そして、著者の問題意識の展開は次の局面に導かれる。すなわち、「日常的な生そのものへの埋没が超越的な価値との回路を開くような、個人的生と超越的な価値との新しい座標軸の在り方」を求めて、ヨーロッパ一九世紀末の文芸からサンボリズムを受容した鷗外へのアプローチの視点である。ここを起点として、「第三節 鷗外文学とサンボリズム」・「第四節 『阿部一族』のサンボリズム」が展開される。

著者は鷗外のサンボリズムの性格を二系統に整理している。

「此岸を彼岸に近づけるため、自己に宿る超越的価値の意志に従

って、現実に対する働きかけを社会的に実践していくような、主体の在り方」(二元論的サンボリズム)と、「日常への埋没を通じて、超越的価値との回路を開き、それへの従属を実現していくような、主体の在り方」(一元論的サンボリズム)である。サンボリズム受容に基づくこのような思索を鷗外にもたらししたのは、「明治四〇年代における自然主義の台頭と懷疑主義的風潮」であると指摘することを著者は忘れない。また、二元論的サンボリズムを表象する人物像へのネガティブな捉え方が、明治四三年九月以降に発表されている翻訳作品群に多出していることに着目し、大逆事件発覚との関わりを示唆してもいる。鷗外の内的思索もまた、時代との回路のなかで活性化され、方向付けられているのである。

二元論的サンボリズムから一元論的サンボリズムへの移行は、「見ようによつては、思想的後退」と見えて、その実、「啓蒙の色」を捨て去り、「自身の実存の問題とダイレクトに繋がる形で」語られ始めた「個人の日常的生に深く関わる文学的表現」を鷗外は達成していると野村氏は指摘する。

その移行を鷗外作品内部に求めるなら、「カズイスチカ」(明治44・2)の花房学士の認識変化が対応する。花房は「遠い向うに或物を望んで、目前の事を好い加減に済ませて行く」自分に反して、「つまらない日常のことに全幅の精神を傾注している」父に、「有道者の面目」を見て、「父を尊敬する念」(「カズイスチカ」本文より)を生じている。この花房の父が「体現する思想」を、鷗

外の翻訳紹介したイブセンやリルケの「自己意識」などと比較し、さらには、「それを敷衍すれば」「阿部一族」の世界観に通じていると付言するあたり、やはり、諸作品の内外を闊歩する著者のフットワークは自在で軽快である。

私見によるなら「阿部一族」の登場人物たちの行動原理と心理を解析した「第四節」は本書白眉の論考である。

「阿部一族」では、そもそも人格や自我というような〈私〉の連続性を保証するようなシステムそのものが存在しない世界が、開示されている」と言う著者は、そこでは、「生成しては莫滅していく、そして、それぞれが矛盾しているさまざまな情念の連続体」として人間の内面が捉えられているとする。それは「近代的な主体観念が成立する以前の」内面の風景である。

このような人間群像を描き切った鷗外の内面には、「統一的人格を自明視する近代の人格概念や科学的合理的な思考法すら、何かを隠蔽する形においてのみ成立している」という認識があった。だからこそ逆に、「近代的主体観念を捨棄したところで形象される」「歴史小説の世界像」を描き得たということであろうか。それを通じて鷗外は、「偶然や不条理を必然に転化すると同時に何物をも矯正したり排除しないような、此岸の現実を丸ごと肯定してしまうような超越的価値の復権」に向かっている。「近代の知性の限界点」における或る種の「神話的価値」の「復権」——鷗外の思索の課程はこのように辿られている。

本書の支柱と思われる鷗外に関する論考を瞥見してきた。タイト

ルと対応させるなら、「森鷗外の歴史意識」に相当する部分である。他の章は「その問題圏」に括られるべき論考である。サブタイトル等を引用するかたちで、その内容を紹介しておきたい。「明治初期の政治小説」(第一章)、「社会ダーウィニズムと美的生活論争」(第二章)、「大正期の与謝野晶子」(第四章)、「小林秀雄の私小説批評」(第五章)である。付言するなら、これら各章を通じて、著者の問題意識は同一である。たとえば、「鷗外の主体意識をちょうど反転させたところに」与謝野晶子の生命主義があると言うように。「それぞれが矛盾しているように見える一瞬一瞬の個別的な感情の生起は、外見的にそう見えるだけで、どちらも『生命』という超越的価値の発現であるというのが、晶子の主体観である」と著者は続ける。ここに用いられている主要なタームが「阿部一族」論と共通していることは言うまでもない。

さて、紙数は尽きた。最後にもう一度私的な叙述をお許しただきたい。私にとつて魅力的な書評とは、未読の人には当該著書への興趣をそそり、既読の人には自身の読後感を語りたいと思わせる書評である。拙文が紙面を埋める責を果たすにとどまらず、そのような喚起力をもっているかと問うと、心もとない限りである。

(見洋書房 二〇〇二年十一月 二〇六頁 二二〇〇円)  
つじもと・ちづ 本学非常勤講師)